

日本の安全・安心神話が崩れた一年だったのではないだろうか? マンション等の強度偽装、小学女児の受難、安全を誇った JR が起こした大事故。リフォームや振り込め詐欺の横行、日本よ何処に行く!

地域の鎮守様でもある野火止の氷川神社からの封書が届いたので、何事ならんと開封したところ、宮司の丁寧な挨拶状と神社暦が同封されていた。神社暦は埼玉県神社庁発行の B6 版 28 ページの冊子で、皇紀二六六六年、平成 18 丙戌年、世紀 2006 年版である。

平成 18 年は、昭和 21 年生まれの小生にとっては、本厄である。今年、色々な役職を命ぜられたりして急に多忙になったり、また大した事はないけれども気になることも多々起きたので、前厄の厄払いをしていなかったことに気付いて、氷川神社でお払いを受けた。その関係でこの冊子が送られてきたのであろう。厄払いのお陰かどうかは定かではないけれども、バタバタしながらも個人的にも家族的にも大きな災難が降りかかることもなく平成 17 年を終えることが出来そうだ。感謝!

ところで、頂いた「神社暦」であるが、日本の古来よりの知恵の集大成とも言うべき内容である。帯祝、七五三、お七夜、初宮詣、初節句、年祝、厄年等々の人生儀礼早見表、数年九星表、暦日毎の年中行事、六曜、九星、十二直、二八宿等が記載されている。

各月のお祭り・行事の趣旨、謂れが簡潔に記述されている。例えば 1 月の項には、若水と言う記載がある。その説明には、『元朝最初に汲む水。神前への供え物や調理に用いられ、邪気を除くと言われていました。』となっており、小学生の頃母に言われて元旦の朝水汲みに行った記憶が蘇ってくる。

私達が幼かった頃は今よりもずっと日常生活の中に神様や仏様が居られ、身近な存在だったような気がする。

然しながら、日本人の DNA には日本古来の習俗が刷り込まれており、何か事あるとそれらが出てくる。今でも、大安や友引に拘るのもその例に漏れない。大安や友引は、支那の六壬時課(ろくじんじか)と言う時の占いが我が国に伝わり、日の占いに变化した「六曜」の一つである。因みに六曜とは、「先勝」「友引」「先負」「仏滅」「大安」「赤口(じゃっこう)」であり、それぞれに意味がある。何か為そうとする時にこの六曜を気にする人は相変わらず多いようだ。

また、季節・時候に係わるものも多い。五節句、雑節、四季、二四節気等が明示されており、それらは今でも天気解説で使用されたり、各地の年中行事等に反映されている。

中には二八宿や十二直のように余りポピュラーではないものもあるが、概して、神社暦は参考になる。

他に、国旗日の丸の掲揚に関するしきたり、神社の参拝の方法、民間信仰の神々などについての説明も簡潔明瞭である。

民間信仰の神様として列挙されているのは、荒神、田の神、山の神、産神、水の神、道祖神、福神(七福神等)、厄神である。これらは諸処において見掛ける。

日本古来の叡智、生活の知恵がこの本に凝縮されているようだ。我々は知らず知らずに、この様な習俗の中で生きており、それを当り前と感じ何ら違和感を覚えない。

我が国が高度文明社会になり、高度 IT 社会になったとしても、この伝統は若干の盛衰はあったとしても廃れることはなからう。勿論、この神社暦に言う日々や年、或いは方位、家相等の科学的根拠がないのは道理であり、その事を問題視しても意味がない。大事なことは諸事百般、見えざるものに畏敬の念を持ち、己の身を正しく処するということだろう。時折己の立つ位置を再確認する心の余裕を持つとの知恵なのであろう。八百万の神を等し

く崇める日本人を一神教の人々は理解できないのだろう。ローマ人の物語が終盤に差し掛かったけれども、そのような気がする。所詮は一神教と日本やローマみたいな多神教は水と油なのだろうか。節操がないと言われようが、ほんわかした多神教社会の方が住み心地が良い。